

0.1 H31 数学必修

[1] (1) ${}^tAA = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & a^2 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & a^2 & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & a^4 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ である. よって固有値は $0, 1, a^4$ である.

(2) $P = [p_{ij}]$ ($p_{ij} = p_{ji}$) とする. $AP = \begin{pmatrix} p_{11} & p_{12} & p_{13} \\ a^2 p_{21} & a^2 p_{22} & a^2 p_{23} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & a & a \\ a^3 & a^4 & -a^4 \end{pmatrix}$ より

$$P = \begin{pmatrix} 0 & a & a \\ a & a^2 & -a^2 \\ a & -a^2 & b \end{pmatrix} \quad (b \in \mathbb{R}) \text{ である.}$$

(3) P が直交行列なら列ベクトル全体は正規直交基底をなすから, $a^2 - a^4 - a^2b = 0, -a^3 + ab = 0$ である. よって $a = 0, \pm 1/\sqrt{2}$ である. $a = 0$ なら一列目が零ベクトルとなるから基底をなさない. よって $a \neq 0$ である. $a = \pm 1/\sqrt{2}$ とすると $b = 1/2$ である. このとき正規直交基底をなすことが確認できる. よって $a = \pm 1/\sqrt{2}$

(4) (3) より $a = \pm 1/\sqrt{2}$ である. $AP = B$ より ${}^t(AP)AP = {}^tBB$ である. tAA の固有値 λ とその固有ベクトル v に対して ${}^tBB(P^{-1}v) = {}^tP^tAAv = P^{-1}\lambda v = \lambda(P^{-1}v)$ である. よって tBB の固有値は $0, 1, 1/4$ である.

[2] (1) $BA = \begin{pmatrix} 0 & -\omega_p \\ -\omega_p & 0 \end{pmatrix}$ である. $B^2 = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}, B^3 = \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}, AB^3 = \begin{pmatrix} 0 & -\omega_p \\ -\omega_p & 0 \end{pmatrix}$ である. よって $AB^3 = BA$ である.

(2) 単位行列を E とする. $B^4 = E$ であるから B の位数は 4. $A^n = \begin{pmatrix} \omega_p^n & 0 \\ 0 & (-1)^n \omega_p^n \end{pmatrix}$ である. ω_p は 1 の原始 p 乗根であり p は奇数であるから, A の位数は $2p$ である.

(3) G は A, B で生成されるから G の任意の元は $P = A^{i_1}B^{j_1}A^{i_2} \dots A^{i_n}B^{j_n}$ ($i_1, j_1, \dots, i_n, j_n \in \mathbb{Z}$) と表せる. A, B は共に位数が有限であるから $i_k, j_k \geq 0$ と仮定して一般性を失わない. $BA = AB^3$ より $B^{j_k-1}A^{i_k} = B^{j_k-1-1}AB^3A^{i_k-1} = AB^{3j_k}A^{i_k-1} = A^2B^{9j_k}A^{i_k-2} = \dots = A^{i_k}B^{3^{j_k}j_k}$ である. P に繰り返しこれを適用することで A^iB^j ($i, j \geq 0$) とできる.

(4) A^i は対角成分以外が 0 であるから $A^i = B^j \neq E$ とすると, $j = 2$ である. $\omega_p^i = -1$ なら $\omega_p^{2i} = 1$ より $2i = pq$ なる整数 q が存在する. 2 は p を因数にもたないから i は p の倍数である. これは $\omega_p^p = 1$ に矛盾. よって $H_1 \cap H_2 = \{E\}$ である.

(5) $A^iB^j \in G, B^n \in H_2$ を任意にとると, $(A^iB^j)^{-1}B^n(A^iB^j) = B^{4-j}A^{2p-i}B^nA^iB^j = B^{4-j}A^{2p-i}A^iB^{3n}B^j = B^{3n} \in H_2$ より H_2 は G の正規部分群である. $H_2H_1 = G$ も明らかである. したがって $G \cong H_2 \rtimes H_1$ である. すなわち G の位数は $2p \cdot 4 = 8p$ である.

\vdots $A^iB^j = A^sB^t$ とすると, $A^{i-s} = B^{t-j}$ であり, (4) より $i = s, j = t$ である. よって $G = \{A^iB^j \mid 0 \leq i \leq 2p-1, 0 \leq j \leq 3\}$ である. よって G の位数は $8p$ である. \vdots

[3] (1) $(x, y) = (r \cos \theta, r \sin \theta)$ と極座標変換する. ヤコビアンは r である. 積分領域は $D' = \{(r, \theta) \mid 0 \leq r \leq 1, -\pi/4 \leq \theta \leq \pi/4\}$ である.

$$\begin{aligned} \iint_D \frac{x}{1+x^2+y^2} dx dy &= \iint_{D'} \frac{r \cos \theta}{1+r^2} r dr d\theta = \int_{-\pi/4}^{\pi/4} \cos \theta d\theta \int_0^1 \frac{1}{1+r^2} dr \\ &= [\sin \theta]_{-\pi/4}^{\pi/4} [r - \arctan r]_0^1 = \sqrt{2} \left(1 - \frac{\pi}{4}\right) \end{aligned}$$

(2)

$$\begin{aligned}f_x &= 2xe^{-x^2-y^2} + (x^2 - y^2)(-2x)e^{-x^2-y^2} = 2(-x^3 + xy^2 + x)e^{-x^2-y^2} \\f_y &= -2ye^{-x^2-y^2} + (x^2 - y^2)(-2y)e^{-x^2-y^2} = 2(y^3 - x^2y - y)e^{-x^2-y^2} \\f_{xx} &= 2(-3x^2 + y^2 + 1)e^{-x^2-y^2} + 2(-x^3 + xy^2 + x)(-2x)e^{-x^2-y^2} = 2(2x^4 - 5x^2 - 2x^2y^2 + y^2 + 1)e^{-x^2-y^2} \\f_{yy} &= 2(3y^2 - x^2 - 1)e^{-x^2-y^2} + 2(y^3 - x^2y - y)(-2y)e^{-x^2-y^2} = 2(-2y^4 + 5y^2 + 2x^2y^2 - x^2 - 1)e^{-x^2-y^2} \\f_{xy} &= 2(xy)e^{-x^2-y^2} + 2(-x^3 + xy^2 + x)(-2y)e^{-x^2-y^2} = 4(x^3y - xy^3)e^{-x^2-y^2}\end{aligned}$$

である. $f_x(x, y) = f_y(x, y) = 0$ とすると, $(x, y) = (0, 0), (0, \pm 1), (\pm 1, 0)$ である. 各点におけるヘッシアンを考える. $(0, 0)$ において $\begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & -2 \end{pmatrix}$ で, 行列式が負であるから鞍点. $(0, \pm 1)$ において $\begin{pmatrix} 4 & 0 \\ 0 & 4 \end{pmatrix}$ で, 行列式が正で, 1, 1 成分が正であるから極小点. $(\pm 1, 0)$ において $\begin{pmatrix} -4 & 0 \\ 0 & -4 \end{pmatrix}$ で, 行列式が正であり, 1, 1 成分が負であるから極大点である.

(3) $|a_n| \leq |a_{n-1}|/c \leq |a_{n-2}|/c^2 \leq \dots \leq |a_0|/c^n$ である. よって $\sum_{n=0}^{\infty} |a_n x^n| \leq |a_0| \sum_{n=0}^{\infty} (\frac{|x|}{c})^n$ である. 右辺は $|x|/c < 1$ で収束するから $|x| < c$ で収束する. よって絶対収束するから収束する.

[4] (1) $p, q \in X, p \neq q$ を任意にとる. $d(p, q) > 0$ である. $r = d(p, q)/2$ とする. $x \in X$ に対して $B(x, \varepsilon) = \{y \in X \mid d(x, y) < \varepsilon\}$ とすると, $B(x, \varepsilon)$ は開集合である. $y \in B(p, r) \cap B(q, r)$ とすると, $d(p, y) < r, d(q, y) < r$ であるが, $d(p, q) < d(p, y) + d(y, q) = 2r = d(p, q)$ となり矛盾. よって $B(p, r) \cap B(q, r) = \emptyset$ であるからハウスドルフ.

(2) $n \in \mathbb{Z}$ に対して開集合 $(-1/2 + n, n + 1/2)$ に対して $(-1/2 + n, n + 1/2) \cap \mathbb{Z} = \{n\}$ であるから離散位相.

(3) $f(A)$ の開被覆 $S = \{U_\lambda \mid \lambda \in \Lambda\}$ を任意にとる. $A \subset \bigcup_{\lambda \in \Lambda} f^{-1}(U_\lambda)$ より有限部分集合 $\Lambda' \subset \Lambda$ が存在して $A \subset \bigcup_{\lambda \in \Lambda'} f^{-1}(U_\lambda)$ である. よって $f(A) \subset \bigcup_{\lambda \in \Lambda'} U_\lambda$ であるからコンパクト.